第3節　小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査

1．ライフライン再生（特高受変電設備）工事に伴う立会調査

図 17　調査区位置図

写真40　調査地点土層断面（北東から）

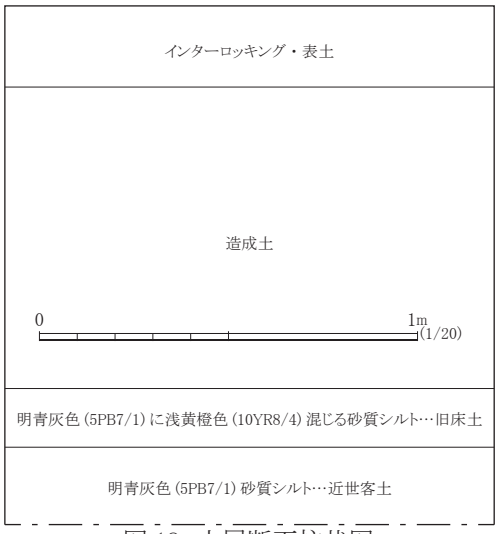

図 18　土層断面柱状図

調査地区　小串構内北入口南側空閑地

調査面積　91㎡

調査期間　令和2年9月8日

調査担当　横山成己

調査結果

令和元年度末に、小串構内北西部に位置する特高受変電棟およびエネルギーセンター棟から特高ケーブルを新設する計画が医学部より提出された。前者は共同溝にケーブルを引き込む計画であったが、後者は新たに地下掘削を行い埋設する計画であったことから、令和元年度第8回埋蔵文化財資料館専門委員会（令和2年3月30日開催）にて埋蔵文化財の有無を確認するための立会調査の実施が諮られ、承認された。

調査は、深度が最も深くなる北入口横の掘削時に行った（図17、写真40）。断面精査の結果、インターロッキングおよび表土の下に層厚80㎝の造成土が存在し、その直下が層厚16㎝の明青灰色（5PB7/1）に浅黄橙色（10YR8/4）混じるシルト（旧床土）であることを確認した。大正年間から昭和初期にかけて、旧山口県立宇部工業学校または旧宇部市高等小学校造成時に、耕土を除去したのであろう。

床土の下位に層厚20㎝以上の明青灰色（5PB7/1）砂質シルトを検出した。これは近世の耕地化に伴う客土とみられ[註1]、既往の調査では主として中近世の遺物が出土しているが、今回の調査では遺物の包含を確認できなかった。

当客土は、小串構内北部では現地表下150㎝ほどで検出されることが多いが、北東端部においてはおよそ120㎝で検出されることが明らかとなった。今後の埋蔵文化財保護対応時の指標にしたい。

【註】

1）横山成己（2006）「医学部基幹整備（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館(編)，『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』，山口